

中国チベット自治区・未踏の霊山 カイラース —四宗教の複合的聖地—

宮本久義

東洋大学大学院客員教授

カイラース山（海拔 6656 メートル。別名カンリンポチェ）は、中華人民共和国のチベット自治区南西部に位置し、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒、仏教徒、ボン教徒たちが等しく霊山と崇める聖域として知られている。1992年に歴史学者の色川大吉氏を隊長とする日本西藏聖山踏査隊^{注1)}に参加し、巡礼者への聞き取り調査を行った。その時の記録をもとに、カイラースに関する4宗教の宗教的背景、踏査の概要、巡礼者調査について報告する。

I. はじめに

カイラース山を訪れた早い時期の報告は、イエズス会の宣教師イッポリト・デジデリ（1684-1733）をはじめスウェーデン人の探検家スウェン・ヘディン（1865-1952）などの西欧人のもの、またこの地の民間の習俗なども伝える日本僧河口慧海（1866-1945）の旅行記など興味深いものがあるが、この聖域に関する4宗教の相互の関係については不明の部分が多かった。その理由は、チベットがこの地への入境を長期間禁止してきたこと、また近年では中印国境のあおりを受けてインド側からの巡礼路が1962年から19年間封鎖されたこと、さらに文化大革命の時期にはチベット人自身の巡礼も禁止されていたことなどが上げられる。その後この地域が外国人に開放された直後の1985年には当時同志社大学教授であった玉村和彦氏がチベット人巡礼者の実態調査を行っているが、インド側から訪れるヒンドゥー教徒のものは含まれていない。

筆者は1992年8月の約1か月間、色川大吉氏の組織した踏査隊に参加させていただき、巡礼者への質問調査を行う機会を得たので、4宗教の神話的世界観あるいは民間伝承におけるこの聖地の信仰における共通点と相違点について、若干古いデータではあるが報告させていただく^{注2)}。

II. カイラース巡礼の宗教的背景

カイラース山が4宗教を信奉する人々にとって、それぞれどのような意味を持っているのかをまず見てみよう^{注3)}。

1) ヒンドゥー教

インドの国民的叙事詩『マハーバーラタ』（5世紀頃成立）や多くのプラーナ聖典に説かれるヒンドゥー教の世界観によると、世界の中心にはメール山が聳え立っている。その周囲に広がる世界の構造にはいくつかの説があるが、いずれにせよ、カイラース山はメール山の南側で、かつヒマラヤ山脈の北側に位置するとされる。カイラース山にはヒンドゥー教の主宰神の石柱であるシヴァ神とその神妃パールヴァティーの住処があり、シヴァ神はそこで苦行に励んでいるとされる。カイラース山は独立峰で、その屹立する山容自体が、シヴァ神の宇宙的根源力の表徴であるリング（男性器）に似ているので、ヒンドゥー教徒は古代より崇拜の対象としてきた。

カイラース山の南方には、ブラフマー神が心（マナス）から創造した湖（サローヴァラ）という意味のマーナサローワル湖があり、シヴァ神の恩恵を得るために多くの聖仙たちが苦行をしたとされる。インド亜大陸を潤す4大河、すなわちインダス（獅泉河）本流と、下流でインダスに合流するサトラジ（象泉河）、それに下流でガンジスに合流することになるブラフマプトラ（馬泉河）とカルナーリー（孔雀河）が、いずれもカイラース周辺地域に源泉を持つことから、河川信仰の盛んなヒンドゥー教徒たちは、マーナサローワルをその象徴と考えたのであろう。山岳信仰の対象であるカイラースは河川信仰のマーナサローワルと一対をなして、ヒンドゥー教の世界観を形成しているといえる。

2) ジャイナ教

ジャイナ教は仏教の開祖ブッダと同時代のマハーヴィーラによって開かれた宗教であるが、伝承では彼以前に23人の救済者あるいは勝者(ジナ)と呼ばれる祖師がいたといわれる。その第一勝者であるリシャバが解脱を得て涅槃に入った場所がカイラスだとされる。ジャイナ教はヒンドゥー教よりも優れた、より古い宗教であることを主張するが、実在が疑わしいリシャバをカイラスに結び付けたのは、ヒンドゥー教の権威を借りるためだったと考えられる。

3) 仏教

仏教では5世紀の仏教哲学者ヴァスバンドウ(世親)の著した『阿毘達磨俱舍論』において、須弥山(メール、スメール)説と呼ばれる広大な世界観が展開された。それによると、世界の中心には須弥山が聳え、その東西南北に4つの大陸がある。南の瞻部州はインド亜大陸に似た形状をしていて、その中心より北に向かうと大雪山(ヒマラーヤ)があり、さらにその北に香醉山(ガンダマダナ)と呼ばれる山がある。大雪山と香醉山の間には無熱惱池(アナヴァタプタ)という大きな湖があって、そこから4大河が流れ出ているという。現在の地勢とは多少異なるが、香醉山はカイラスに、無熱惱池はマーナサローワルに相当すると思われる。

チベットに仏教がもたらされたのは8世紀半ば頃で、13世紀初頭にインドで仏教が滅亡するまで続々とその教義が伝えられた。チベット語ではカイラスはカンリンポチュ(宝貝の雪山)あるいはカンティセと呼ぶが、カンティセはカイラスを主峰とする山脈(岡底斯山脈)を指すこともある。チベット仏教徒はここをサンヴァラ系の密教の尊格でハールカの一形態とされるデムチョク(勝樂尊、チャクラサンヴァラ)と明妃ドルジェパーモ(金剛牝豚、ヴァジュラヴァーラーヒー)の住処であると考え。詳しい検証はここでは省くが、チベット仏教徒はヒンドゥー教の伝承にならいつつ、また自分たちの宗教の優位性を示すために、シヴァ神とその妃のかわりにデムチョクとその妃を配したといえる。

4) ボン(ボン)教

ボン教は仏教がチベットに導入されてから、それに対抗するかたちで、宗教としての形態を整えた。伝承によれば、ここは仏教到来以前からの聖地で、「シャンシュン地方のボン教の山」とも呼ぶ。ボン教の開祖とされるシェンラブ・ミボが天から綱を伝って降臨した場所といわれる。チベット仏教行者で詩人のミラレーバ(1040-1123)とボン教のナローブンチュンの幻術合戦の伝承が多く残されているように、この地域をめぐる宗教的覇権争いはかなり熾烈なものだったことが推測される。

以上見てきたように、カイラス山は4宗教共通の崇拜対象でありながらも、神話や教義の上では対立関係にある複雑な複合的聖地であるといえる。

Ⅲ. 主要な巡礼地の踏査概要

まずカイラスまでの道のりを記しておこう。東京から空路で北京、成都を経て、ラサには8月3日に到着した。ラサからはトヨタのランドクルーザー3台とテントや食料、燃料を積む中国製のトラック1台をチャーターし、日本人隊員8名と、中国側の連絡官、通訳、運転手、炊事係が8名という編成で西に向かった。往路はヤルツァンボ川沿いの道を行く許可が下りず、北に大きく迂回するチャンタン高原の道を通らなければならなかった。宿泊は道の要衝にある招待所を別として、ほとんどは比較的の良い水が得られる小川のほとりにキャンプを設営した。(ちなみに、復路はヤルツァンボ川沿いに東に進み、シシャパンマの麓でキャンプしたりしたあと、ラサには寄らずにネパールのカトマンドゥまで一気に下った。)高原といっても海拔4500から5000メートルを超え、どこまでも続く雄大な荒野である。途中何度も電に見舞われ、隊員の何人もが高山病に苦しめられる過酷な旅であった。高山病対策として持参したガモウ・バッグは大活躍であったが、最悪の状況も覚悟していた。ラサを出発して10日目にチベット西端の街シーチュワンホー(獅泉河)に着いた。チャンタン越えて消耗した体力を取り戻すため数日滞在したあと、新蔵公路を東南に下り巡礼地に向かった。

まず訪れたのは、河口慧海が、この地を詣でなければカイラスを参詣したことになる、と



地図1 カイラス山とその周辺地域 (『季刊民族学』64号、p.101、1993)

いうチベットのこゝろをわが国を紹介している聖地である。ヒンドゥー教徒はティールタブリー（巡礼の街）と呼び、現地でも聞いた発音もそれが訛ったようなタータブリー、ディクタブリーなどであったが、河口慧海は餓鬼の街（プレタブリー）とする。この場所は小高い丘の上に僧院が1つあり、それを中心に約1キロの環状の巡礼路がある。仏教僧パドマサンバヴァ（8世紀）がここを訪れて魔類を調伏したという伝承が残っていて、彼らが固まったとされる奇岩が点在する。ここは温泉地帯で、かなり広範囲に灰白色に変色した地面が剥き出しになっていて、不気味な雰囲気が漂う場所であった。

ティールタブリーをあとにして新蔵公路まで戻り、そこから東南に1時間ほど行くと、カイラス山南壁が見えた。今まで写真で見えてきた壁面の卍の印が眼前に確認できたときには、よくぞここまでやってきたと感激一入であった。ベースキャンプにあたるタルチュン（海拔4200メートル）には、数十人が滞在できる招待所のほかは、テント村があるきりである。招待所にはインド人の巡礼者グループがカイラスをまわってちょうど戻ってきたところで、荷物運搬に雇ったヤクの労賃をめぐってチベット人と大騒ぎしていた。

翌朝、我々もヤクを雇って周囲約52キロの円環路の巡礼に出発した。普通は二泊三日の行程で回るが、1日で回ってしまう人や五体投地でゆっくり回る人などさまざまである。仏教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒は右繞（時計回り）、ボン教徒は逆回りである。ここでガイド兼通訳として同行していただいたチュイン・ドルジェ氏は、北インドのヒンドゥー教聖地バナーラスのサンスクリット大学に留学して仏教とヒンドゥー教を学んだ経歴の持ち主で、母語のチベット語のほか、英語、サンスクリット語、ヒンディー語に堪能で、巡礼者への質問調査および異なる宗教の信奉者にとって巡礼路の風景がそれぞれどのような意味を持つかを解説していただき、たいへんお世話になった。

巡礼路最大の難所は北東にあるドルマ峠（5636メートル）で、その直前のきつい上りを、河口慧海は「三途の脱れ坂」と呼んでいるほどである。ドルマとは観音菩薩が生類を憐れんで流した涙から生まれたという慈悲の女神である。あたりには無数のタルチョー（祈願の旗）が結ばれ、岩には頭髮や歯、硬貨や紙幣が埋め込まれている。ここを離れると道は急に下りになる。巡礼の途中で2泊したときの星空は筆舌に尽くしがたいものとし



カイラース巡礼路 (『西藏仏教』1990年第一期より)

地図2 カイラース山巡礼路 (『創造の世界』86号、p.56、1993)

て記憶に残っている。

カイラースをあとにして、いったんインド国境の街プランに立ち寄り、交易の現況を見たりしたあと、8月28日に最後の目的地マーナサローワル湖に着いた。カイラース一帯がヒンドゥー教徒のあいだで格別の信仰を得た背景には、ガンジス川に対する熱烈な信仰がある。ガンジスに流れ込む無数の支流のうちの一つ、カルナーリー川はマーナサローワル付近に源流を持っている。さらに、古代インドの教典ではマーナサローワルから、インダス、サトラジ、ブラフマプトラ、カルナーリーの4大河が、湖を敬礼するように右回りに旋回してからそれぞれの方角に流れ下るとされたが、それはちょうどカイラース南壁の左旋の卍が湖に反映した姿からの連想のように筆者には考えられる。インドからヒマラヤを越えてはるばるやって来る巡礼者が最初に眼にするのが、マーナサローワル湖に映るこの壮麗な卍だからである。

IV. 巡礼者調査

巡礼者(17グループ、計135名)に対するインタビュー調査を、同行した社会学者の上野千鶴子氏とともに、ティールタプリー、タルチェン、

カイラース巡礼路、プラン、マーナサローワルで行った。調査項目は玉村和彦氏が1985年に行ったものと比較できるように同じとし、そのほかに神話、伝承の知識や巡礼経験を追加した。その結果、巡礼者の大半は牧民か半農半牧民で、旅程のどこかでトラックを利用する者が増えてきたこと、カイラースにまつわる神話の知識はどの宗教の信奉者もほとんど持っていなかったこと、などがわかった。自身の宗教の知識でさえ持っていない人が多いので、他宗教の神話や伝承は、おそらくほとんど知らないと考えられる。また、チベット仏教徒とボン教徒は反目しているかと思っていたが、実際はそのようなことは見受けられなかった。短期間の見聞では正しいかどうかかわからないが、他宗教に関しては総じて無関心といつてよい。ただしチベット人はインド人巡礼者のことはあまりよくは思っていないようである。今回会ったインド人巡礼者グループは、カイラース巡礼のあいだ山容がまったく拝めなかったそうであるが、チベット人たちは、彼らが来るとカイラースの天候が悪くなる、とにがにがしげに言っていた。調査全般については詳しくは参考文献に挙げた拙稿「聖地カイラース巡礼の宗教的背景と実態」をご覧になっていただくと幸いであるが、ここでは一つだけ文化大革命の及ぼした影響について記しておきたい。文化大革命は一般に1966年に始まったとされる。チベットにはタイムラグがあって数年遅れでやってきたというが、いずれにせよ、文革のあいだは巡礼が禁止され、隠れて行ったことがわかれば処罰されたという。チベットで文革が終息する1981年頃までにチベットのいたるところで僧院が破壊され、仏具が盗難にあったりするが、実はチベット人自身がその当事者であった場合があるという証言をいろいろなところで聞いた。このことについて、上野氏は文革以前のチベット社会には強い身分階層があり、そのような階級社会に対する下位者のルサンチマンが文革期の秩序転覆の背景にあったという説を紹介している^{註4)}。チベット仏教に対して漢民族に属する人が一方的に破壊行為をしているわけではないところに、政治・社会・宗教にまたがるチベット問題の計り知れぬ根深さがあるといえよう。

表1 カイラース山巡礼者調査 (宮本久義「聖地カイラース巡礼の宗教的背景と実態」『東洋研究』111号、p.11、1994)

〈表1〉 カイラース山巡礼者調査

1人性別不明

グループ 番号	調査 場所	グループ 構成		宗 教	職 業	出身地	交通手段	片道 日数	タルチェン 滞在日数	費 用	巡礼回数
		全	男女								
1	Ti	5	1 3	仏教	僧/尼僧	ナクチュ地区	徒歩+車	2~3年	半年	自費(全1000元)+喜捨	右回り13+1(五体投地礼)+M1
2	Ti+K	24	18 6	仏教	農牧/農	チャムド地区	徒歩+車	2ヵ月	1ヵ月	自費(各2500元)	右13+1予定
3	Ti	1	1	仏教	僧	ガリ地区グギシェ	徒歩	7日		喜捨	右13+1予定
4	Ta+P	30	21 9	ヒンドゥー/ジャイナ	多様	インド	徒歩+車	2週間	4日	自費	右1
5	Ta	1	1	ヒンドゥー	修行者	ネパール	徒歩	2週間	20日	喜捨	右21
6	K	4	4	仏教		ネパール	徒歩	5日			
7	K	27	26 1	ボン教	農牧	チャムド地区	徒歩	5ヵ月	5ヵ月半	喜捨	左30~100+M1
8	K+M	2	1 1	ボン教	牧	チャムド地区	徒歩		1年	自費+喜捨	左50/110
9	K	2	2	仏教		タルチェン付近	徒歩	当日	宿泊不要	自費	右2+α
10	K	3	1 2	仏教	僧/尼僧	ガリ地区グギシェ	徒歩	20日	2年		右70~100+1~2
11	K	3	3	仏教	僧						右100+1~2
12	K	2	2	仏教							
13	K	19	19	仏教		チャムド地区	車	10日	2週間	自費(各160元)	右7~8予定
14	K	1	1	仏教	僧		車(親戚の)	1年	1年予定		右13予定
15	K	9	6 3	仏教	牧	四川省デルゲ	車		1ヵ月	自費(片道400元)	右13予定
16	K	1	1	仏教	牧	ガリ地区ギャルツェ	徒歩+車	20日	1ヵ月	喜捨	右27+M9
17	K	1	1	ボン教	農牧	チャムド地区	徒歩+車	1年	1年	自費+喜捨	左100+M3予定

Ti=ティールタブリー、K=カイラース巡礼路、Ta=タルチェン、P=プラン、M=マーナサローワル

聖地カイラース巡礼の宗教的背景と実態 (11)

V. おわりに

チベット踏査から戻った半年後の1993年1月11日の朝日新聞に、「未踏峰、21世紀まで残るか」という記事が掲載された。8千メートル峰14座は1964年までに登りつくされたが、未踏の7千メートル峰にも各国隊が一番乗りしようとしのぎを削っているという内容であった。その記事の最後にカイラースが次のように書かれていた。無数にある6千メートル級で処女峰のまま永久に残りそうなのがこの山だというのである。そして、ここを訪れたイタリアの名登山家ラインホルト・メスナーの、「これほど崇められている聖山に登る気はしない」という言葉が紹介されていた。この言葉通り、霊山カイラースがいつまでも未踏のままであることを願ってやまない。

注

- 1) メンバーは、隊長の色川大吉ほか、塩澤厚、松本栄一、上野千鶴子、葛西眞一郎、葛西研二、竹内裕の各氏、それに小生の8名であった。

- 2) 本稿は、第37回雲南懇話会(2016年6月25日、JICA市ヶ谷国際会議場)での発表と、以前の論文【宮本1993】、【宮本1994】および【上野1993】に基づき、若干の追加、修正を施したものである。
- 3) 「カイラース」という表記はヒンディー語あるいはその姉妹言語の発音に基づく。サンスクリット語では「カイラーサ」となるが、混乱を避けるため、前記の表記に統一しておく。以下に出てくる「マーナサローワル」(ヒンディー)と「マーナサローヴァラ」(サンスクリット)も同様である。
- 4) 【上野1993 p.74】参照。

参考文献

- 1) Allen, Charles, 1982 *A Mountain in Tibet: The Search for Mount Kailas and the Sources of the Great Rivers of India*. Great Britain: Andre Deutsch. (C・アレン著、宮持優訳1988『チベットの山—カイラス山とインド大河の源流を探る』未来社、1988)

- 2) Snelling, John, 1983 *The Sacred Mountain: Travellers and Pilgrims at Mount Kailas in Western Tibet, and the Great Universal Symbol of the Sacred Mountain*. London and The Hague: East West Publications.
- 3) Swami Pranavananda, 1983 *Kailas – Manasarovar*. New Delhi: Swami Pranavananda. (1st ed. Calcutta: S.P.League, 1949)
- 4) 上野千鶴子 1993 「カイラース巡礼」『創造の世界』86号、小学館
- 5) 小西正捷・宮本久義（編）1995 『インド・道の文化誌』春秋社
- 6) 玉村和彦 1987 『聖地巡礼』山と溪谷社
- 7) 宮本久義 1993 「複合的聖地カイラース」『季刊民族学』64号
- 8) 宮本久義 1994 「聖地カイラース巡礼の宗教的背景と実態」『東洋研究』111号
- 9) 宮本久義 2003 『ヒンドゥー聖地 思索の旅』山川出版社



写真1 カイラス山(海拔6656メートル)北面。手前は外輪山の一部(1992.8.23。掲載写真は全て宮本久義撮影)



写真2 チベット仏教徒の3組の巡礼者。左の3人は僧侶、中央は行者の暮らしをする父と2人娘、右の2人は40代の姉妹(1992.8.23)

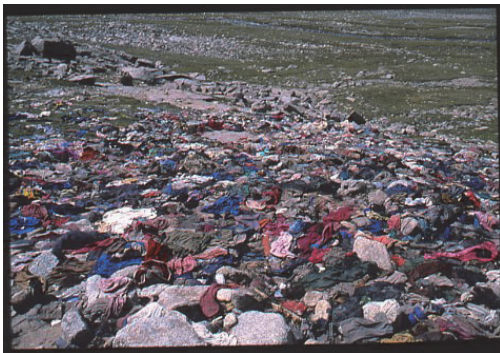


写真3 ドルマ峠手前の鳥葬場。ガイドのドルジェさんが数日前に通った時には2歳くらいの子供の屍体を見たという(1992.8.23)



写真4 色とりどりの祈禱旗タルチョーがはためくルマ峠(海拔約5600メートル)(1992.8.23)



写真5 ティールタブリーの巡礼路の途中に積まれた祈禱の石。遠方に白く霞んでいるのは温泉地帯(1992.8.20)



写真6 マーナサローワル湖畔に行く巡礼者。周囲約100キロの楕円形で太陽を象徴しているとされる(1992.8.29)

Summary

The Unclimbed Sacred Mountain Kailas: The Complexed Sanctuary in Tibet

Hisayoshi Miyamoto

Graduate School of Letters, Toyo University

Mt. Kailas (6656m., Gans rin po che) is situated in southwest Tibet, China. This mountain is known as one of the most sacred mountains for Hindus, Jains, Buddhists and Pon believers. In 1992, I had the opportunity to participate the Japan-Tibet Sacred Mountain Traversing Party and made the intensive investigation of pilgrims through interview. On the basis of that research, I report the each religious background of four religions, the summary of traverses and the comments on the interview to pilgrim.

Keywords: Kailas, Pilgrimage, Complexed Sanctuary, Hindu, Buddhist